THE INVISIBLE BATON



敷居 1

見えないバトン

祖父は、いつか誰かが自分について書くことになるとは知らなかった。

父は、いつか誰かが自分の下したいくつかの選択の意味を探ることになるとは知らなかった。

私は、長いあいだ、物語が存在することさえ知らなかった。

存在するのはただ日々だけだと思っていた。

普通の日々。

やり過ごすべき日々。

仕事、問題、顧客、責任、電話、旅、守られた約束と宙に浮いたままの約束でできた日々。

世界の何百万もの人々と同じように。

大きな物語は、ほとんどいつも間違ったやり方で語られる。

終わりから始まる。

結果を見せる。

成功を誇示する。

人生を、ある点から別の点へ必然的に至る一本の直線に変えてしまう。

現実はそんなふうには動かない。

現実は目に見えない受け渡しの集まりだ。

父親が気づかぬまま教訓を教える瞬間を、誰も見ていない。

息子がそれを胸にしまうと決める瞬間を、誰も見ていない。

ひとつの原則が一つの世代を通り抜け、次の世代を探しに行く瞬間を、誰も見ていない。

それでも、長く続く物語が生まれるのはまさにそこだ。

スポットライトの中ではない。

沈黙の中でだ。

長い年月、私は自分の家族の三世代と Gillette との結びつきを、単なる職業上の偶然だと思っていた。

一つの会社。

一つの仕事。

一つのキャリア。

ありふれた道のり。

やがて時間が、いちばん得意なことをし始めた。

点と点をつないだ。

起きたときには孤立して見える出来事を、隣り合わせに並べた。

目に見えない幾何学を組み上げた。

そして少しずつ私は理解した。本当の主人公は会社ではなかった。

継続だった。

なぜならブランドは変わりうるからだ。

市場は変わりうる。

製品は変わりうる。

世界さえ変わりうる。

だが、許可を求めることなくすべてを貫いて通る価値というものが存在する。

規律。

交わした約束。

責任。

仕事に向き合うときの尊厳。

自分の名前が自分の役職よりも重いという考え。

こうしたものは決算書には現れない。

履歴書にも現れない。

新聞の見出しを生むこともない。

だが、それは人生を築くための目に見えない礎だ。

道の途中で出会った多くの人々を覚えている。

並外れた人もいた。

忘れられた人もいた。

力のある人もいた。

脆い人もいた。

年月が経つうちに、あることに気づいた。

外側の違いは途方もなく大きかった。

内側の違いはずっと小さかった。

どこへ行こうと、どの国で働こうと、出会うのはいつも同じ問いと格闘する男たちと女たちだった。

どうやって約束を守るか。

どうやって家族を守るか。

どうやって喪失に向き合うか。

諦めるほうが楽なときに、どうやって立ち続けるか。

どうやって続けるか。

いつも、ただそれだけ。

続けること。

この物語が異なる文化を越えていけるのは、たぶんそのためだ。

会社について語るからではない。

私について語るからではない。

すべての人間に覚えのある何かについて語るからだ。

遺産。

経済的なそれではない。

物質的なそれではない。

目に見えないそれだ。

署名を必要とせずに人から人へ渡っていくもの。

どんな公証人にも証明できないもの。

困難な瞬間に下されるひとつの決断に現れるもの。

守られたひとつの言葉に。

受け入れられたひとつの犠牲に。

証人もなくなされたひとつの断念に。

もっと若かった頃は、目標はたどり着くことだと思っていた。

手に入れること。

勝ち取ること。

勝つこと。

今はもう、それほど確信が持てない。

今は、人生の本当の物差しは別のものだと信じている。

騒がしさが終わったとき、何が残るのか？

肩書きが消えたとき、何が生き残るのか？

人がいなくなったとき、何が歩き続けるのか？

私が見つけた答えは単純だ。

残るのは、私たちが伝えたものだ。

残るのは、気づかぬうちに教えたものだ。

残るのは、他人をどう扱ったかだ。

残るのは、私たちが何になったかだ。

そして血が残る。

生物としての血ではない。

血縁の血ではない。

道徳の継続としての血。

糸として。

帰属として。

歩き続ける記憶として。

だからこの物語は製品から始まらない。

ブランドから始まらない。

一人の人間からさえ始まらない。

ひとつの受け渡しから始まる。

時を越えて渡っていく、見えないバトン。

一つの世代から次の世代へ。

一つの手から別の手へ。

一つの名前から別の名前へ。

三人の男。

三つの時代。

三つの異なる道。

ただ一本の糸。

三つの刃。

一つの血。

そして残りのすべては、その後に来る。